

[日本の陶磁展によせて]

古瀬戸瓶子について

今回の「日本の陶磁展」で初公開される作品の一つに「瀬戸灰釉印花巴文瓶子」(カット③)があります。この作品の紹介の方々、世に名高い古瀬戸の瓶子について少々述べてみることに致します。

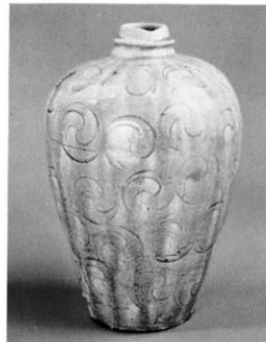
この、当館新収の瓶子は鎌倉時代後期、14世紀中葉の作と考えられるもので、高さは25.7センチ、胴径は17.2センチ、底径は9.1センチで、古瀬戸瓶子としては標準的な大きさです。素地は灰白色の良質な陶土で、成形は粘土紐を輪積にして行い、そのご轆轤(ろくろ)で整形してあります。口頸部は内傾した比較的大きなものですが、その中間部には鐙状の突起があります。肩は円く豊に張っており、そこから底部に向かって器体はやや直線的にすぼまっています。口頸部の作りは精緻で力強く、肩から底に到る輪郭線も柔かく流麗です。全体的に均衡が取れて、安定感のある姿をしています。

模様は頸の付根に三条の柵目沈線をめぐるし、それから下は底部まで印花巴文を五段に連ねて、びっしり施しています。印花巴文は灰釉や鉄釉の古瀬戸瓶子にはいくつか遺例があり、珍しいものではありませんが、しかしこのように器面のほぼ全体にわたって隙間なく施文してあるものは、筆者は寡

聞にして他に例を知りません。器面全体には灰釉が厚く掛かっておりますが、釉はよく溶けて、いかにも古瀬戸らしい美しい淡緑色を呈し、縦に釉縞(くすりじま)となつて流下しています。

古瀬戸瓶子はそもそも中国で南宋時代に数多く作られた梅瓶(めいびん)の形を模倣したものと考えられています。鎌倉時代には特に竜泉窯の青磁と景德鎮窯の青白磁が大量に輸入されましたので、瀬戸の窯には瓶子に限らず器形や施文技法など様々な影響を受けたようです。瓶子の用途は主に酒器であったと考えられますが、出土した瓶子の中には骨蔵器に使用されていたものもありますので、一概には決めつけられないようです。これらの瓶子はいつ頃から焼かれ始めたかと言いますと、今日のところ鎌倉中期、13世紀後期と考えられています。それでは古瀬戸瓶子を作品によって年代の古い順にみてみることに致します。

カット①の瓶子はその初期、13世紀の数少ない優品の一つで、愛知県瀬戸市八床町から出土した灰釉のものです。この作品は一見しただけで中国・宋代の梅瓶を思い起こさせる程に、その形を忠実に模しています。古瀬戸の瓶子にはこのような、円い肩から裾へ直線的



③瀬戸灰釉印花巴文瓶子 14世紀

に細まる直腰型のものと、カット②のように肩から急に腰で細まって、裾でやや広がる締腰(しめごし)型の二種類があります。この二つの型によって古瀬戸瓶子の大半が二分されますが、締腰型は直腰型より後にあらわれ、先に消滅する器形です。

カット②の瓶子は岐阜県郡上郡白鳥町にある白山神社境内から一対で出土した有名なものです。二点とも窠彫の銘文があり、それによって正和元年(1312)12月に白山権現に御酒器として奉納されたものであることが判かります。この年紀は古瀬戸の紀年作品の中では最も古く、古瀬戸の貴重な年代基準資料となっています。従って、カット①に続く鎌倉後期、14世紀初期の典型的な瓶子の作例となるものです。カット①・②とも素地は耐火度の高い良質な陶土ですが、成形は①が輪積(わづみ)成形・轆轤仕上であるのにたいし、②は轆轤水挽き成形です。釉も共に木灰だけを成分としたものですが、①は還元焰によって鮮やかな淡緑色を呈しています。それに比べて②は酸化気味になったせいか暗緑色に発色しています。

なお、古瀬戸の灰釉は初期には木灰単味で、釉層も薄いのですが後には次第にサバと呼ばれる長石質の釉材が加えられて、釉層が厚くなり、釉調も安定してきます。②の作品も肩の部分はやや厚目で、安定した釉調を見せていますが、



④瀬戸鉄釉印花巴文瓶 14世紀

それから下は流条化して釉縞になっています。

カット④の瓶子は当館所蔵のもの(カット③)と同じく印花巴文で装飾され、全体の形や大きさもほぼ同様です。従って両者の製作年代も同時期、即ち14世紀中葉と推測されますが、ただ④はこれまで述べてきた灰釉のものとは違い、鉄釉をかけたものです。鉄釉と云いましてこの時期のものはまだ透明性のある餡釉で、濃淡のむらの多いものです。この瓶子も全体に鉄釉が厚くかけられていますが、焼成が良いため明かるい茶褐色を呈し、その濃淡のむらがかえって釉膚を味わい深いものになっています。

古瀬戸の釉薬は灰釉と鉄釉の二つが基本になっていますが、まず最初に灰釉が用いられ、次に鉄釉が登場しました。鉄釉の初現は古瀬戸中期、すなわち13世紀末頃と考えられています。カット③や④の瓶子が作られた14世紀中葉は鎌倉末から南北朝にかけての時期に当たりますが、この頃が古瀬戸の最盛期です。これらの瓶子は四耳壺等と共に古瀬戸を代表するものであり、また鎌倉らしい強くたくましい造形をつつみ込んで、幽玄な趣きをたたえるあの朽葉色の古瀬戸釉は日本のやきものの中で最も美しい釉薬の一つと言えます。この小文は橋崎彰一氏の意見を参考に致しました。

(吉田宏志)

①瀬戸灰釉瓶子 13世紀



②瀬戸灰釉瓶子 正和元年銘

